DOCUMENT

沖縄／南西諸島 急激に進むミサイル基地化

本土も組み込まれる列島ミサイル・ライン

東アジア共同体研究所琉球・沖縄センター顧問
緒方 修

沖縄は現在、台湾に近い南西諸島のミサイル基地化がどんどん進んでいる。どうなっているのか――その現状を緒方修（元文化放送／沖縄大学客員教授・東アジア共同体研究所琉球・沖縄センター顧問）氏に、講演を元に、レポートしてもらった。メジャー新聞や雑誌が報道しない重大事実がここにある。

まず、沖縄についてですが、沖縄の米軍基地は、もう七六年続いています。自衛隊の幹部によると「沖縄は米軍にとってはなくてはならない戦略的にベストの場所である」ということです。確かに、中国大陸、また朝鮮半島、東南アジア、マラッカ海峡に対して、扇の要の位置にあり、

88 式対艦誘導ミサイル

12 式対艦誘導ミサイル

ここから全て睨みがきき、また攻撃可能という地理的好位置にあります。また中近東への派兵もここからなら容易になります。

左の写真をご覧ください。

これは、沖縄島の最北端辺戸岬にある「祖国復帰闘争碑」です。五〇年前は、島の北は日本で、こちら側は米軍の占領地だったのです。この写真をよく見てみると飛行機があんなに低く飛んでいる。何でこんなに低空飛行をしているのか――沖縄の人はピンとくるわけで、これは何かの前兆ではないだろうか、と疑います。ベトナム戦争の時なんか

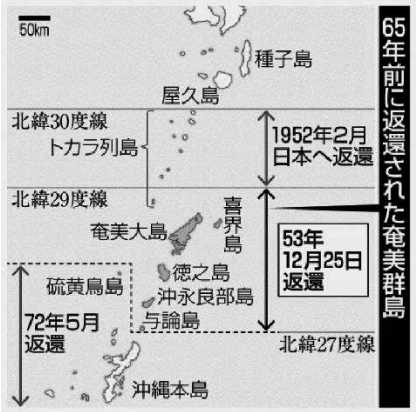
オスプレイ

はめちゃくちゃ飛んでいました。これは何かあるなと地元の人はすぐに感じるわけです。では、この低空飛行で、何をするんでしょうか。

僕は那覇に住んでいて、たまたま去年三回も大動脈瘤の手術で琉球大学付属病院に入院していました。琉球大学病院は、高台にあるので、オスプレイがほとんど窓の真横を飛んでいます。低空飛行が目につくので、何か訓練をしているらしいと察しがつくわけです。そういうことからしても、沖縄は前線に位置していることを感じます。

この沖縄島の最北端辺戸岬から二二キロの所に与論島（よろんとう）がすぐに見えます、その北には奄美大島（あまみおおしま）があります。沖縄島と与論島の間の北緯二七度線に沖縄返還前の国境があったのです（下図参照）。

沖縄の返還は一九七二年ですが、奄美大島は一九五三年にすでに返還されています。サンフランシスコの講和条約を締結した時で



す。なぜ先に奄美大島が返還されたのか――それは、基地として使えないからです。奄美大島は山がいっぱいあって飛行場は造れない。沖縄は平地が広がっているから飛行場をはじめいろいろ設備が造れるという、地形的に大きな違いがあるからです。それで米軍は、沖縄をずーっと占領し、七三年の返還後も、基地はそのまま変わらずに機能させているわけです。

それは何よりも東アジアの戦略に欠かせない重要な位置にあるからです。

■沖縄の新聞記事に見る沖縄の現状

沖縄の新聞には、本土の主要新聞には載っていないような、しかし重要な記事がたくさん載っています。琉球新報一面には、例えば「民間港で自衛隊訓練」、「民間の港をみんな貸し出す」、「普天間でオスプレイによる吊り下げ訓練」などの記事が頻繁に掲載されています。

オスプレイという飛行機は、ヘリコプターと飛行機の中間みたいな輸送機で、プロペラ部分を上下に立てることができるので、垂直に離着陸できます。しかも機体は大きいのでヘリコプターよりも大量の輸送ができます。ですから、離島作戦や兵員輸送作戦など、一度に多くの兵を運んで戦場へ下ろすのには非

常に便利な輸送機です。「吊り下げ訓練」というのは、前線の戦闘地域に兵を下ろす訓練でしょうね。でも、オスプレイはプロペラが二つしかなく、それを立てるためでしょうか、安定性がなく、たびたび落ちる。未亡人がたくさん出るので、「未亡人製造機」なんて揶揄される、欠陥飛行機です。そういうのが、一〇〇機くらい来ます。今も二〇機くらいが沖縄の空を飛び回っています。

また最近では「宮古島に弾薬」というのもありました。「弾薬」とは、何の弾薬でしょうか?――ミサイルです。

最近は特にこのミサイル基地が宮古島をはじめ、南西諸島に続々と造られ、ミサイルが着々と配備されています。沖縄県民はもとより、日本国民が知らない間に、ミサイル基地が広がっているのです。沖縄諸島、南西諸島は、ミサイル基地帯となっているのです。

■南西諸島のミサイル基地化

現代の戦争はミサイルが主力です。ミサイルで全てカタがついてしまうと言っても過言ではありません。

ミサイルは内部の酸素を使って飛ぶロケット構造で、スピードが違います。最新鋭の戦闘機でも音速（340.5ｍ／秒〈摂氏15度〉）の二倍～三倍で、マッハ2～3、時速二五〇〇㎞から三五〇〇㎞の速さです。一時間で日本列島を往復できます。しかしミサイルはこの二倍以上の速さで、時速六一二〇㎞、マッハ5です。ロシアのウラジオストックから東京までが約一一〇〇㎞、そこからミサイルを発射すると、約一一分で東京に届きます。北朝鮮からは一〇分です。ちなみに、沖縄の那覇から東京までは一三〇〇㎞で、ウラジオストックの方が近いことになります。

沖縄と、南西諸島の位置関係を見ていきましょう。

左地図をご覧ください。南西諸島の各島の位置ですが、鹿児島のすぐ南に、種子島と屋久島があり、そのそばに馬毛島（まげしま）という無人島があります。この島は国が、一六〇億円で購入しました。これが第一の島群で、そこから少し南へ離れて奄美大島、徳之島、沖永良部島（おきのえらぶ）と続き、沖縄本島があります。これが第二の島群です。そこからまた少し離れて、第三の島群があり、宮古島、石垣島、与那国島（よなぐにじま）、西表（いりおもて）島という、台湾に近い諸島が並んでいます。与那国島は台湾のすぐ近くで、一〇八kmしかありません。鹿児島から与那国島まで約一三〇〇kmで、これは日本列島がスッポリ入る距離です。

そして、この与那国島のすぐ北に、問題の尖閣諸島があります。元々の日本の領土に対し、石油資源が発見されたことから中国が領有を主張してきた、問題海域です。尖閣諸島は台湾からも、与那国島からも、石垣島からも、ほぼ等距離で、一七〇kmしかありません。沖縄本島からも、四一〇kmです。また中国本土とも約三三〇kmしか離れていないのです。

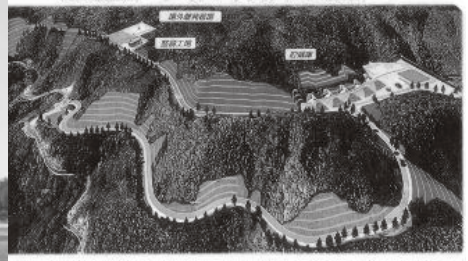
この海域、南西諸島地域に、今、日本の防衛省が大規模にミサイル基地を配備しています。これを「南西シフト」と呼び、与那国島約二〇〇人、石垣島約六〇〇人、宮古島八〇〇人、沖縄本島約八〇〇〇人、奄美大島約六〇〇人、種子島と馬毛島を合わせて一〇〇〇人以上と、当面の規模でも合計一万人以上の大部隊が、配備されることになっています。

沖縄／南西諸島
急激に進むミサイル基地化

奄美大島 2020 年 1 月 24 日、奄美駐屯地からの初めての行軍訓練

水陸機動団配備の水陸両用車

宮古島保良 弾薬庫建設地 ドローンによる空撮


建設中の奄美大島・瀬戸内町節子地区弾薬庫（完成は 2024 年 12 月／情報公開文書）左上にヘリパッド予定

12 式対艦誘導弾

■アメリカ軍の戦略下に

なぜ、このように、南西諸島にミサイル基地が大規模に配備されることになったのか――近年のその軍事配備の大変化の背後には、アメリカ軍の大きな戦略変化があります。

アメリカ軍には「オフショア・コントロール」と呼ばれる戦略があり、大陸沿岸部に沿った包囲封鎖網を作る、封じ込め作戦です。これは、中国が太平洋に進出する際に通過しなければならない第一列島線と呼ばれるラインを想定し、それを封鎖して、その内側に中国を閉じ込めてしまおうというものです。これは北朝鮮にも、ロシアにも当てはまります。（上図参照）

これによってアメリカは有事の際、中国・北朝鮮の世界との貿易のほとんどを遮断できるだけでなく、中国の潜水艦による自国への核攻撃を心配することがなくなり、戦略的に優位に立つことができると言われています。アメリカの国防戦略の基本は、外敵は自国に寄せ付けず、できる限り遠くの海上で、あるいは敵地領域において撃破するというものです。

実際アメリカは二〇一〇年にはシンガポールに沿岸戦闘艦を配備、二〇一六年にはフィリピンに米軍拠点を復活させました。沖縄及び南西諸島の島々を防波堤のようにして、中国を封じ込める南西シフトもこのオフショア・コントロールに基づいています。

またこれは、決して沖縄と南西諸島に限られたものではなく、もっと広範な地域を対象にした戦略で、カムチャッカ半島の下から千島列島、北海道、本州、九州と、日本列島もその長大な大陸包囲防衛ラインに組み込まれた、五千キロに及ぶ大規模な包囲帯なのです。現在はそれに大規模ミサイル網が加重されたということです。

この変化には、北朝鮮の核武装化が進み、危険を孕んできていること、中国の国力の増大とともに、軍備が拡張され、空母を建艦したり、ミサイルを増強したり、北西のウイグル自治区に五〇〇基の大陸間弾道ミサイル基地が建設されるなど、軍強大化の動きが進んでいることへの対応が中心ですが、さらに大きな要因として、二〇一九年八月二日にＩＮＦ中距離核戦力全廃条約が破棄された国際情勢があります。全廃の対象になった中距離弾道弾とは、射程五〇〇～五〇〇〇㎞のもので、ソ連がヨーロッパ向けにＳＳ20を配備し、アメリカはパーシングⅡと巡航ミサイルを配備していたものを互いに全廃するという条約でした。しかしこの条約をアメリカが破棄し、新たな冷戦構造が生まれました。アメリカをはじめ各国が中距離核ミサイルを増強し、特にイランや中国、北朝鮮、インド、パキスタン、イスラエルなどの核後発国の中距離ミサイルが増えているのが現在の世界の核情勢です。

■南西諸島地域は最前線

日本の自衛隊は、この諸島地域に、まさにアメリカの対中国の最前線としてミサイル基地を建設しているのです。この一、二年、本格的にその作業が進んで、軍事演習も頻繁化しています。宮古島、石垣島は、それぞれ五万人以上が住んでいる沖縄の離島の中では一番大きな島です。ここに、自衛隊がミサイル基地を造っています。島によっては自衛隊の兵員が急激に増え、その兵によって男性の島民が増加している、住民の偏りまで生まれています。

南西諸島へのミサイル配備について。まず、石垣島には、大体五〇〇～六〇〇人自衛隊が配置されます。南西諸島全体では約一万人が配置され、二月ごろには早速二万人規模で演習が始まると計画されています。どういう演習かというと、三〇〇〇人規模のパラシュート部隊が飛行機から降りてきて島を奪還する戦いです。

石垣島の工事はどんどん進んで、これを止めることはどうにもできない。また、石垣市長は、「尖閣がやられたらどうするんだ」とそればかり言っています。本気で、中国

沖縄／南西諸島 急激に進むミサイル基地化

INF 中距離核戦力全廃条約

Intermediate-Range Nuclear Forces Treaty

アメリカ合衆国とソビエト連邦との間に結ばれた軍縮条約の一つで、中距離核戦力として定義された核弾頭搭載の中射程弾道ミサイル（射程 500km から 5,500km のもの）と巡航ミサイルを全て廃棄することを取り決めたもの。

これは 1970 年代後半にソ連が多核弾頭新鋭ミサイル SS20（射程 5,000 ㎞で全ヨーロッパを範囲内に収める）を配備して脅威を与えたことに対抗して、アメリカがパーシングⅡ中距離ミサイルと巡航ミサイルを NATO 諸国に配備して緊張が高まったことを受け、アメリカのレーガン大統領とソ連のゴルバチョフ首相によって締結された（ただしこれには、海と空から発射されるものは含まれていない）。

条約はロシアに引き継がれたが、強権を復活させるプーチン政権は、巡航ミサイルの開発に力を注ぐようになり、アメリカから条約違反を指弾された。また、この条約はロシアとアメリカ二国間のみの条約であるため、核大国となって軍備を増強する中国や、インド、北朝鮮、イラン、イスラエルなど他の保有国との間の拘束力を持たないものだった。

21 世紀になり、中国は中央アジアのウィグル自治区に 500 基規模の弾道ミサイルの大基地を建設、さらに核弾頭を米ソと並ぶまで増産する計画を進めており、また北朝鮮も核保有に加えて頻繁にミサイル実験を行うなどの状況から、アジアの核保有国との間をも含めた新たな広い条約が必要となっており、中国に対して核軍縮に加わるよう提案したが、中国は無視、ロシアのプーチン大統領も巡航ミサイル開発を止めなかったことから、アメリカは 2019 年強硬路線のトランプ大統領によって、INF 条約を廃棄した。またトランプは特に、台頭する中国と北朝鮮の核を警戒し、中距離核ミサイルを大陸に沿った列島に長大に配備して、中国を中距離核ミサイルで包囲する戦略をとった。この日本も含む列島ミサイル帯に射程の長いミサイルを配備すれば、中国本土全体が収められる。

がやってくる心配をしている。そもそも中国が本当にやって来るんでしょうか。尖閣諸島を占領するんでしょうか。

尖閣諸島は、鄧小平の時も、「領土問題は、一〇〇年ぐらい棚上げしていいよ」と言われているんです。

中国も、この海域に埋蔵されている石油に触手が動いていると言われますが、もっと他に目的があるようです。また日本の南西諸島のミサイル基地化も、その背後には隠された大きな目的がありそうです。我々はもっとそれに目を向けていかなければならないと思います。

日本国内では中国の脅威がよく噂されています。ですが、逆に南西諸島に基地を置いた場合のリスクは、あまり伝えられていません。では、基地を置くとどうなるのでしょうか？

ある国の脅威に備えて軍備を増強すると、その国も対抗して軍備を増強し、軍拡競争となりかえって安全保障上のリスクが高まることを、「安全保障のジレンマ」と言います。偶発的な衝突がエスカレートすれば、核戦争にまで至る危険性があります。南西諸島のミサイル化は、このエスカレートの危険を孕んだものであることを考えなければなりません。

■南西諸島のミサイル要塞化

米軍と自衛隊は中国軍の海洋進出を阻止する南西諸島（奄美～琉球列島）のミサイル要塞化を進めています。

以下は軍事ジャーナリスト小西誠氏のレポートによるものですが、自衛隊は奄美大島、宮古島にミサイル部隊を配置し、宮古島に弾薬庫を建設。石垣島にもミサイル基地を急ピッチで建築中です。監視部隊を配置する与那国島、沖縄本島にもミサイル部隊配備計画が報道されています。

さらに米軍による南西諸島への中距離ミサイル配備計画も伝えられました。

南西諸島が米軍・自衛隊が一体となったミサイル戦争の最前線と化し、沖縄県民、奄美の住民が戦争の犠牲となる

写真・イラスト／軍事ジャーナリスト・小西誠氏提供

沖縄／南西諸島　急激に進むミサイル基地化
――本土も組み込まれる列島ミサイル・ライン

スタンド・オフ防衛能力に５兆円
外国製ミサイル購入も明記―安保文書骨子案

政府が年末に改定する国家安全保障戦略など安保３文書の骨子案が 2022 年 12 月９日、明らかになった。敵の射程圏外から攻撃できるスタンド・オフ防衛能力に５兆円を計上するとした上で、米国製巡航ミサイル「トマホーク」を念頭に、「外国製スタンド・オフ・ミサイルの着実な導入」も明記した。

５兆円は 2023 年度から５年間の経費。また、スタンド・オフ・ミサイルについては「地上発射型・潜水艦発射型を含め、ミサイルの運用可能な能力を強化」するとした。

防衛力の抜本強化に向けて重視する能力を分類。スタンド・オフ防衛能力▽統合防空ミサイル防衛能力▽無人アセット防衛能力▽領域横断作戦能力▽指揮統制・情報関連機能▽機動展開能力・国民保護▽持続性・強靱（きょうじん）性――の七つとした。

サイバー分野では「重要なシステムを中心に常時継続的にリスク管理を実施する体制」を取るとし、「能動的サイバー防御」（アクティブ・サイバー・ディフェンス）の導入を打ち出した。

敵のミサイル基地をたたく「反撃能力」（敵基地攻撃能力）保有も明記。「相手の領域において、わが国が有効な反撃を加えることを可能とする、スタンド・オフ防衛能力等を活用した自衛隊の能力」と定義した。（時事）

スタンド・オフ攻撃能力

現代戦において長射程のミサイル、巡航ミサイルなどが敵の対空火器・ミサイルの射程外から攻撃できる能力。ことばとしては攻撃者が敵の射程の「外に立つ」という意味で「スタンドオフ (standoff) 能力」。　アウトレンジ（範囲の外）の原理。

米軍・中距離ミサイル配備計画

トランプ政権において中距離核戦力（ＩＮＦ）全廃条約の廃棄が決定されたが、重要なのは、同時に日米中露のミサイル軍拡競争が直ちに始まったということだ。数年後には、在日米軍による沖縄等への中距離弾道ミサイル配備（非核戦力）も計画化されている。そして、米海兵隊、米陸軍の南西シフト態勢下の「島嶼戦争」においての地対艦ミサイル、地対空ミサイル部隊の配備も進行中。つまり、南西諸島・琉球弧への凄まじいミサイル配備計画が進行しており、このミサイル配備が、中国、米国を含むミサイル軍拡競争へと発展しつつあるのが現状である。

（軍事ジャーナリスト小西誠氏「ミサイル戦争の要塞化が進む南西諸島」より）

ナーバルストライク・ミサイル

自衛隊水陸機動団の米海兵隊との共同演習
（前身の西部方面普通科連隊とは 2006 年から演習）

危機が高まっているのです。

■与那国島

台湾から一〇八kmと一番近い与那国島の事情です。与那国島の二〇二一年十月の世帯数は、九三六世帯で、人口は男が九〇〇人、女が七六九人で、一三〇人くらい男性が多い。普通島の人口は女性の方が多いんですが、これは一六〇人ほど自衛隊員が来てからそういう人口構成になってしまいました。全員成人ですから、例えば町長選挙で賛成と反対を問うたら、自衛隊員は全員賛成。島の政治に影響が出るわけです。島民わずか一六六九人のうちの一割が自衛隊員、プラス家族ということで、自衛隊賛成派の意見が通ります。

与那国島には演習部隊が七〇人いて、丘の上にアンテナがあり、見張っています。そして、「貯蔵庫」と地元では説明しているようですが、弾薬庫、火薬庫があります。ここに引火したら大ごとになります。

南西シフト態勢の中で、いち早く自衛隊部隊が配備されたのは、この日本の最西端・与那国島です。台湾まできわめて近い与那国島は、台湾との間の海峡を頻繁に中国の軍民艦船が行き来しています。この与那国島の山頂に五基、異様にそびえるのが、陸上自衛隊沿岸監視隊一六〇人の沿岸監視レーダーサイトです。駐屯地東側の一段と高い場所に対空レーダーが配置されているのです。

沿岸監視隊には「兵站施設」（巨大弾薬庫）、情報保全隊（旧調査隊）、警務隊も配備されています。空自・移動警戒隊も昨年配備完了、警務隊も二〇一六年配備完了。将来は、地対艦ミサイル・地対空ミサイル部隊なども配備の可能性があります（与那国島の地対空ミサイル部隊は新「防衛力整備計画」で配備決定）。米政府のシンクタンク・戦略予算評価センターの「海洋プレッシャー戦略」南西諸島配置図には、与那国島の地対艦ミサイル部隊が描かれています。

■石垣島

石垣島には、陸自対艦・対空ミサイル部隊、警備部隊六〇〇人が配備され、今年三月一八日にはミサイルを含む弾薬が搬入される予定です。

石垣島では、二〇一九年三月から基地建設工事が始まりました。このミサイル基地予定地は豊かな農村地帯で於茂

島の中心にあるインビ岳のレーダー群。情報は約6キロ離れた駐屯地まで地底の埋設ケーブルで送られる。周辺は森が深く天然記念物や絶滅危惧種を始め100種以上の希少種や固有種が生息している

沿岸監視レーダーなど　久部良集落を見下ろす高台には陸自の沿岸監視レーダーのほか空自の移動警戒隊も展開している。180m先には民家が密集、レーダーが出す電磁波や、基地が攻撃対象になる危険性を住民は訴えてきたが省みられることはなかった

与那国駐屯地全景　横に長いのは主に独身の隊員用の隊舎、手前右から整備場、受電所、局舎、その奥に訓練施設。陸自160名空自50名の構成だが、米軍との共同使用増派部隊の受け入れも視野に入れて、今後どのような基地機能の強化が行われるかは不明

貯蔵庫、実は弾薬庫　一際大きく目を引くのがこの「弾薬庫」。防衛省は一貫して「貯蔵庫」と町や住民に説明し続けてきた。住民投票から一年後、駐屯地が新設されたが、どんな弾薬を保管するかなどの議論が起きていれば住民投票の結果も変わっていたかもしれない

急激に進むミサイル基地化
――本土も組み込まれる列島ミサイル・ライン

島嶼防衛用高速滑空弾システム
（イメージ）

防衛省自衛隊ホームページより

自衛隊・超高速滑空弾配備

2018年新防衛大綱・新中期防では、「島嶼防衛用**高速滑空弾**部隊・2個**高速滑空弾**大隊」の新設を明記している。**高速滑空弾**（ミサイル）とは、現在、日米中露が激しい開発競争をしている新型のミサイルであり、迎撃不可能であるとされる。防衛省・自衛隊は、超高速滑空弾の開発を決定し、いずれも宮古島などの南西諸島へ配備する予定だ。

超高速滑空弾はロケットによって打ち上げられたのちに滑空体が切り離され、弾道飛行を経て滑空飛行に移り、終末航程では急降下（ダイブ）によって目標に突入する[6]。滑空体のみで飛翔させることでレーダー反射断面積（RCS）を極小化させられるほか、特に滑空飛行の段階では、GPSなど衛星測位システム（GNSS）の誘導を受けて複雑な軌道で飛行することも可能であり、高速度と相まって、従来のミサイルよりも迎撃が困難とされる。

令和8年（2026年）度から射程数百キロのブロック1の配備を開始し、2030年代から射程2,000キロから3,000キロで極超音速飛行が可能なブロック2Bの配備を開始する予定。

南西シフト態勢下では、このほか、巡航ミサイルの開発配備、スタンドオフ・ミサイルの配備決定（2017年）など、恐るべきミサイル戦争態勢づくりが進行している。

（軍事ジャーナリスト小西誠氏「ミサイル戦争の要塞化が進む南西諸島」より）

DOCUMENT

2017年1月29日　市民大集会「これでいいのか？ミサイル基地受け入れ〜住民無視の市政をみんなで考えよう〜」開催（総合体育館メインアリーナ）約800人参加。（八重山毎日新聞提供）

2019年3月1日　市民連絡会　予定地入口で住民無視の工事着工に抗議のリレートーク「島の自然と平和守れ！」と声明採択。100人参加。（千葉幹夫氏撮影）

2020年2月11日　「ミサイル基地に市有地売らない！貸さない！」市民ウォーク

石垣島　平得大俣・陸自基地建設計画地

平得大俣・陸自基地　造成工事中

2021年3月1日　自衛隊施設予定地　造成工事着工後2年目　3月末の造成工事完了は困難な状況

2021年8月石垣島自衛隊ミサイル基地建設工事

急激に進むミサイル基地化
――本土も組み込まれる列島ミサイル・ライン

弾薬庫建設地　ドローンによる空撮　建設が進められる2棟の弾薬庫。もっとも近い民家との距離は250m

保良　弾薬庫建設地　ドローンによる空撮　南側にひらけた緩やかな斜面に保良集落の家々が立ち並ぶ

2021年3月　宮古島・保良ミサイル弾薬庫2棟完成。3棟目が建設予定

保良　弾薬庫訓練場　ミサイル部隊訓練　敷地内で進められる建設工事と並行して、宮古島駐屯地部隊は早々に訓練を開始した。高台でのレーダー展開訓練

登岳から湧く水源地帯でもあります。国の特別天然記念物カンムリワシを始め、島の希少動物たちの生息地でもあるこの土地にミサイル基地を造るという防衛省・自衛隊の計画に、市内の住民・市民はもとより、島の青年たちも起ち上がり、激しい反対運動が、広がりました。とりわけ、平得大俣（ひらえおおまた）の農村青年たちを中心に、運動は基地建設の是非を問う、住民投票を求める戦いへと発展しました。そして、住民署名は、わずか一カ月の間に石垣市民の有権者の4割を超える約一万四八四四筆に結実したのです。ところが、保守派石垣市長らは「市条例に基づく住民投票実施」を拒否する横暴に出、全国的に優れた石垣市の「自治基本条例」を廃止する行動に出ました。この暴挙は、住民の激しい抗議にさらされ、当然にも頓挫しました。住民投票を求める青年たちは、実施を求めて石垣市を訴えています。

■宮古島

宮古島には二〇二〇年三月に陸自地対艦・地対空ミサイル部隊八〇〇人が宮古空港の東の千代田地域に配備されました。

またミサイル弾薬庫は住民の激しい反対運動の中、二〇一九年十月に宮古島南西端の保良地区に建設工事が始まりました。ミサイル弾薬庫は保良地区の家々からわずか二〇〇mしか離れていません。本来、陸自の地対艦・地対空ミサイル弾薬庫は全て「地中式弾薬庫」で、住宅地から離れた山中をくり抜く型式で造られてきたのですが、保良地区は危険極まりないミサイル弾薬庫を住宅地近くに、しかも「地上覆土式」で造ろうとしています。爆発力の凄まじいミサイル弾薬庫の「地上」設置は、軍事常識からして

南西地域における警備部隊等の概要【宮古島】

自民党の国防議員連盟や地元の保守勢力が軍事利用を主張する宮古島市の下地島空港（滑走路 3,000 メートル）

宮古島上野千代田の陸上自衛隊駐屯地の開設式

宮古島市上野千代田の陸上自衛隊駐屯地。警備隊、第７高射特科群、地対艦ミサイル中隊、整備部隊の約 700 人の配置が完了

宮古島上野千代田の陸上自衛隊駐屯地

急激に進むミサイル基地化
――本土も組み込まれる列島ミサイル・ライン

極東最大の飛行場／米軍嘉手納基地

普天間飛行場のオスプレイ群

も考えられないことです。レーダーサイトやミサイル弾薬庫は、有事の最初の数分間で真っ先に攻撃対象になるからです。保良住民には、敵のミサイルが降り注いでくるだけでなく、凄まじいミサイル弾薬庫の大爆発が起こることになります。

陸上自衛隊教範『火砲弾薬、ロケット弾及び誘導弾』の記述には、こうあります。「誘導弾が火災に遭遇した場合、1㎞以上の距離又は遮蔽物のかげ等に避難（火災から弾頭が発火、爆発等の反応が起こるまでの時間は約2分間）」

宮古島の場合、ミサイル弾薬庫は保良地区の家々からわずか二〇〇ｍしか離れておらず、この教範通りなら、保良・七又の住民に2分間で一キロ以上も逃げろというのでしょうか。地対空ミサイル弾体を多数保管する弾薬庫を、住民居住地近くに造るのは、防衛省の暴挙、住民無視の非常識、非道を認識すべきです。

■沖縄本島

沖縄本島は、他の南西諸島への部隊配備と同時進行で大増強されました。陸上自衛隊は二〇一〇年には六三〇〇人でしたが、二〇二〇年には九〇〇〇人に増えています。

那覇の陸自第15混成団は新「防衛整備計画」で師団に昇格決定。空自部隊も南西航空混成団から南西航空方面隊に昇格。那覇基地のＦ15戦闘機部隊は、二倍の四〇機態勢に増強されました。

沖縄本島は地対艦ミサイル部隊の配備が計画され、新中期防衛力整備計画で、一個中隊配備が決定。これにより、南西諸島で地対艦ミサイル連隊が完結しました。

海上自衛隊は、南西シフト態勢下では、潜水艦部隊が一六隻から二二隻態勢へ、一個護衛隊の増強により護衛艦四七隻から五四隻態勢へ、イージス艦態勢は六隻から八隻へと増強されています。

また沖縄本島には二〇機の対潜哨戒機（P－3C）が配備されます。さらに「島嶼戦争」用新型護衛艦（3900屯級FFM）が二〇一八年度から四隻に、また四年間で八隻が建造されます。機雷戦能力を保有した一〇〇〇トン級新型哨戒艦もまた、「中期防」期間中に四隻、二〇二七年度までに一二隻導入されます。

南西シフト態勢下の新部隊編成として、二〇一八年新防衛大綱等で決定した「いずも」型護衛艦の空母への改修が決定的に重要な意味をなしていると言われています。新中期防では搭載するF35Bを二〇機、新防衛大綱ではF35Bを四二機配備を予定。自衛隊が戦後初めて、二個空母部隊を編成することになります。米空母機動部隊の編成からして将来は3個空母機動部隊が編成されることになります。

この「いずも」型空母の新編成と並んで重要なのが、与那国・石垣・宮古・南北大東島の民間飛行場の軍事基地化です。元西部方面隊総監は、「南西諸島の約二〇の民間空港の軍事基地化」を主張、南西諸島の島々の「不沈空母化」＝軍事化を目論んでいます。その焦点は、最近もまた自民党が提案し、宮古島の保守勢力も主張している宮古島下地島空港（滑走路三〇〇〇m）の軍事化です（18ページ写真）。

現在の沖縄本島の最大の関心事は、辺野古基地建設で、辺野古基地は何のために建設するのかということです。今、普天間基地が町の真ん中にあり、ヘリコプターの数機同時の離発着、「タッチアンドゴー」の戦闘機の離発着など、ものすごい騒音と危険と隣り合わせです。

二〇〇四年に、沖縄国際大学にヘリコプターが墜落しました。危険極まりないので、一刻も早く移転させなくてはいけない。当時の総理大臣橋本龍太郎が、普天間の移設を決めたんです。でも、移設を決めてから何年たっているのでしょうか、いつの間にか、沖縄県内の辺野古に戻ってし

◀グアムからのB-1爆撃機と共同作戦演習をする韓国F35戦闘機機群。日本の沖縄航空自衛隊も昨年2022年にF15とB1の共同作戦演習を行なっている＊

40機態勢となった沖縄空自のF15戦闘機＊

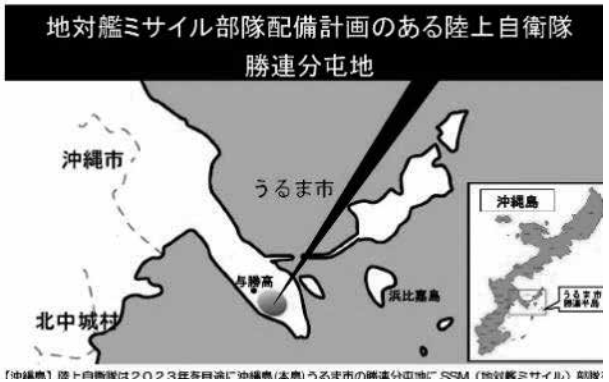
16隻から22隻態勢となった海自潜水艦＊

少しずつ進む辺野古基地建設

＊写真はインターネット画像による

空母に改装された「いずも」＊

沖縄自衛隊勝連分屯地ゲート



2023年度内に勝連分屯地に配備される予定の12式対艦ミサイル

辺野古基地建設反対運動

まった。辺野古の海を埋め立てて基地を建設するので、そこに生息しているサンゴを移植しなければなりませんが、サンゴは移植したら死滅してしまいます。完全に移植が成功した話は聞いたことがありません。

また、V字型の滑走路について元ジェットパイロットに「風の向きによって、ある時は、こっちに着陸して、ある時はこっちから出て行ってということが可能なのか」と聞くと、「そんなことは絶対にできない」と言われました。

埋め立てでなく、いつでもまた撤去できる洋上フロート案もありましたが、結局埋め立て工法になりました。辺野古湾は、ほとんどが五～六mほどの浅瀬が続いているので、埋め立ては割と簡単ですが、V字型の分かれるあたりから急に海底が七〇mくらいに深くなり、その下に軟弱地盤があるため、九〇mくらいをしっかりと固めないことには滑走路が出来ません。これを固めるためには「サンドパイル」といって、砂杭を打ち込み地盤改良工事を行う。その砂の杭本数は七万七千本必要と言われています。しかも、七〇メートルより深い施工技術は今のところなく、施工限界です。で、全部うまくいったとして一二年かかり、費用も県の試算で、二兆四千億かかる。そんな工事を本当にやるつもりでしょうか。また、以前の計画では浅瀬部分だけで滑走路の長さは十分と考えられていましたが、アメリカの政府監査院（GAO）から、国連軍と一緒に使う以上はもっと距離が必要と指摘されています。これも実際は米軍が使用するのですが。日本政府もアメリカ軍も共に地獄の海へ脚を踏み入れることになったのです。もう一つはあの辺は活断層が東西に走っています。その活断層の間に弾薬庫があります。弾薬庫に一体何が入っているのか？　核なのか？　核を隠していたらどうするのか。昔は確実に核がありました。今もあるかもしれません。あるかないかを分からなくしておくのが一番の戦略らしいです。

■奄美大島

奄美大島には、二〇一九年三月、地対艦・地対空ミサイル部隊と警備部隊が島内三カ所に、計五五〇人規模で配備されました。今後さらに、空自の移動警戒隊と空自通信基地が造られる予定です。

このミサイル基地で驚くべきはその規模です。奄美駐屯地（大熊地区）の敷地面積は、約五一㌶、奄美駐屯地瀬戸内分屯地（瀬戸内町）は約四八㌶（石垣島基地の約2倍／宮古島基地の約2・5倍）で、同地区には巨大弾薬庫（約三一㌶）が建設中。山中に造られたトンネル五本のミサイル弾薬庫は、一本が約二五〇mの長さの巨大な地中式弾薬

庫になっています。二本目が完成し、三本目を工事中です。

奄美大島のミサイル弾薬庫は、奄美――馬毛島（種子島）の島々など南西シフト態勢下の、沖縄本島――先島諸島の有事への一大兵站拠点・機動展開拠点・訓練演習拠点として位置付けられ、奄美の瀬戸内町弾薬庫は、南西諸島の有事への、ミサイル弾薬の補給・兵站拠点として配置されているのです。

奄美大島への陸上自衛隊基地配備の経緯は、「戦争のための自衛隊配備に反対する奄美ネット」（代表／城村典文）によれば、次の通りです。

奄美　駐屯地建設　　防衛省情報公開文書より

2019年2月10日、完成間近。貯水池が三箇所設置されている。工事に伴う赤土流出対策には万全を期していると説明

二〇一四年五月に防衛副大臣が奄美市と瀬戸内町を訪れ、奄美大島北部・南部に陸上自衛隊駐屯地を二つ建設したいと申し入れてきました。即座に住民は市民組織「戦争のための自衛隊配備に反対する会」を立ち上げ、誘致反対署名活動や首長要請行動や議会陳情に取り組みました。

しかし、防衛省は地元商工会はじめ保守系民間団体の誘致要望書や保守系議員が圧倒的に多い議会の誘致決議を民意と受け取り、配備を決定してしまいました。

北部の奄美駐屯地の説明会は、二〇一六年六月に地元集落で行った一度きりです。その時初めて防衛省は、北部に

2019年2月3日、瀬戸内分屯地B地区。手前にトンネル式弾薬庫（1本が1，000㎡×5本）が掘られる予定です。現在は2本目を採掘中とのこと

陸上自衛隊奄美駐屯地の開設式

2019年3月23日、瀬戸内分屯地の運動場には、地対艦ミサイルＳＳＭと発射装置本体が並んでいます。まだ、Ｂ地区の弾薬庫は完成していない

は地対空ミサイル部隊、南部には地対艦ミサイル部隊を配備することを明らかにしています。

南部の瀬戸内分屯地の説明会も近隣集落だけで開催されました。市民団体は、「説明会は奄美大島全市町村で行ない、誘致の是非については住民投票が必要だ」と訴えました。

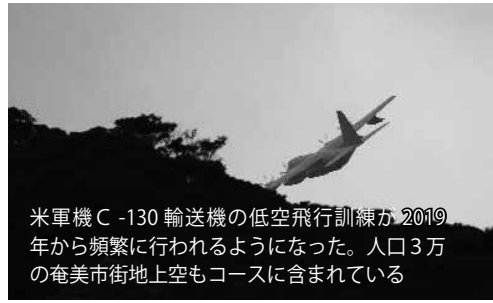
しかしそれも無視され、奄美駐屯地の建設工事は、二〇一七年九月頃から始まってしまいました。防衛省は当初基地の広さを二八ヘクタールと申請したのに、五一ヘクタールに拡大しています。瀬戸内駐屯地も二〇ヘクタールが四八ヘクタールに拡大しました。野鳥の繁殖期にイタジイの深い森を伐採破壊しています。

防衛省が環境保全対策として実施した「環境調査」の開示請求を求めたところ、天然記念物等の貴重生物の生存が明らかになりました。自然遺産のシンボル「アマミノクロウサギ」が、奄美駐屯地予定地には成体一羽、瀬戸内分屯地には成体一五羽が確認されています。幼体は巣穴暮らしですので確認できなかったためか個体数は黒塗りにされていました。

市民団体は、二〇一七年四月に鹿児島地裁名瀬支部に、二つの自衛隊基地建設について「工事差し止め仮処分訴訟」を申し立てました。訴訟事項は「平和的生存権」「自然享受権」「人格権（電磁波による身体影響）」で争いました。

2021年7月6日　奄美大島、陸自瀬戸内分屯地の基地建設工事現場。写真右側にトンネル式のミサイル弾薬庫の入口が見える。奥間政則氏撮影

2020年6月8日、二つの駐屯地の開所後、米軍機オスプレイの飛来回数が増えている。昼、夜二回、水曜、木曜の訓練が多い。送電線の鉄塔の上を乱舞するオスプレイ４機


米軍機Ｃ-130輸送機の低空飛行訓練が2019年から頻繁に行われるようになった。人口３万の奄美市街地上空もコースに含まれている

奥間政則氏撮影

しかし裁判官は、いずれも国の主張を鵜呑みにして、却下を判決しました。

環境対策訴訟審尋で、防衛省は、「訓練は基地内で行なう」「自然環境対策も十二分に行っている」「ミサイル発射用標定レーダーは、有事も十二分に行っている」「ミサイル発射用標定レーダーは、有事に外部から運び入れる」などと答弁しています。

二〇一九年三月二六日駐屯地開所後、早速七月には東北地区第6師団との転地訓練が行なわれました。九月には、離島で初めての日米合同訓練が奄美駐屯地内で行われています。いずれもミサイル防御訓練でした。二〇二〇年一月には、児童生徒の登校時間帯に、小銃を携行した一〇〇名隊列による三〇km行軍訓練が、駐屯地外で行なわれました。

自衛隊配備について防衛省は、「安全保障政策は国の専権事項である」として、行政機関に圧力をかけています。また民意を得たという口実に、地元商工会議をはじめとする官制団体等の誘致要望書などを取り付ける姑息な手段を用いています。

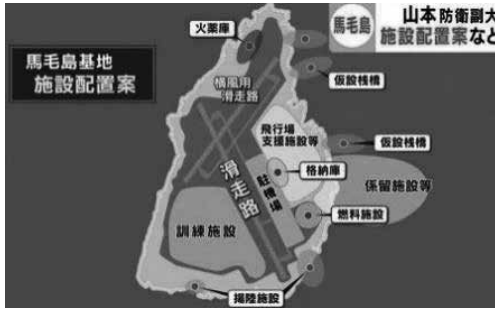
奄美大島をはじめ、南西諸島の各島々が民主的手続きを欠いた国の防衛政策の餌食になり、知らない間に戦争のできる国の防人になりつつあるのを見過ごしてはならないと思います。

■馬毛島（まげしま）

鹿児島からすぐ南の種子島（たねがしま）の沖一二kmの所に馬毛島という小さな島があります。今、この島が「自衛隊史上最大の航空基地」として造られようとしており、文字通りの「要塞島」として位置付けられていることは、強調しておかなければなりません。小西誠氏は共著『虚構の新冷戦 日米軍事一体化と敵基地攻撃論』（芙蓉書房出版）の中で、「ミサイル要塞化が進む南西諸島」として、以下のことを伝えています。

この島は、南西諸島防衛の陸海空自統合運用・後方支援拠点とされ、「自衛隊史上最大の航空基地」「要塞島」として軍事化が進んでいます。メディアでは「米軍の空母艦載機着陸訓練基地」とだけ報道されていますが、防衛省サイ

政府が 160 億円の巨額で購入を計画、すでに買収が始まっている。米軍、自衛隊の軍事基地化に地元が猛反発している馬毛島



トや西之表市サイトでも「他の地域から南西地域への展開訓練施設、島嶼部攻撃等に際して人員・装備の集結・展開拠点として活用、島嶼部への上陸・対処訓練施設」とあり、自衛隊の南西シフトの重要拠点であることが明記されているのです。また二〇一一年の2プラス2（日米安全保障協議委員会）では「南西地域における防衛態勢充実の観点から（略）、通常の訓練等のために使用され、併せて米軍の空母艦載機離発着訓練の恒久的な施設として使用する」とされています。小西誠氏請求の情報公開文書でも統合運用上の馬毛島の価値」として「南西諸島防衛の後方拠点（中継基地）」であると明記されているのです。

ここで「統合運用」とは陸海空三自衛隊の統合化された運用のことです。運用概要は黒塗りで隠されていますが、「南西シフト態勢下の『重要集積拠点』＝兵站拠点、および『機動展開拠点』（中継基地）」であることは明らかです。同時に「統合運用上の馬毛島の価値」として「島嶼部侵攻対処を想定した訓練施設」と明記されています。作戦運用概要は「着上陸訓練等」「戦闘機展開、輸送機による輸送訓練等」と記載されています。「着上陸訓練」とは、水陸機動団を中心とする「島嶼奪回」などの敵地上陸訓練であり、輸送艦、輸送機による訓練拠点にも使用されるということです。

またわざわざ「戦闘機展開」と明記し、空自戦闘機F35などが訓練・演習を行うだけでなく、南西シフト態勢下の発進拠点になるということを示しています。

このため、二つ以上の滑走路を建設予定の馬毛島は、

＊掲載写真をふくむ約 60 枚を、展示用に無料で貸し出します。
お問い合わせは東アジア共同体研究所　琉球・沖縄センター
（電話 098 ー 963 ー 8885　土日を除く 10 時～ 6 時）緒方修
ogata@okinawa-u.ac.jp

沖縄／南西諸島　急激に進むミサイル基地化
――本土も組み込まれる列島ミサイル・ライン

「自衛隊史上最大の航空基地」として造られようとしており、文字通りの「要塞島」として大変貌しているのです。

■南西諸島・日本列島ミサイル基地化の危険性

岩屋防衛大臣はすでに「南西諸島は本土防衛の最前線」と言っています。これは「本土防衛の捨て石になれ」ということにほかなりません。南西シフトは、日本に中国を抑え込んでもらいたい米国と、南西諸島に気を取らせて本土を防衛したい日本政府との合作とも言えます。いずれにせよ、これで南西諸島は、大きなリスクを背負ってしまったことになります。

平和な島々とそこに住む人々の生活は、軍事基地化によって破壊され、これまでの安穏と自然が失われるばかりではなく、敵ミサイルの攻撃によって死の危険と壊滅に晒されることになります。安全保障はむしろ壊滅の危機をもたらしているのです。

そしてこれは、よくその背後の力を探ってみれば、日本列島そのものが危機に晒されていることになります。中国・北朝鮮包囲ミサイル網は、むしろ日本列島を主軸に張り巡らされるものであり、列島全体がミサイル基地化されていく現実を熟慮すべきです。北朝鮮はむしろ本州の方が近い位置にあり、そのミサイル網も整えられているはずです。青森県三沢基地も、東京の横田基地も、神奈川の厚木、横須賀基地も、九州の佐世保基地も、皆この対北朝鮮・中国のシフトに加わっていることを考えるとき、原子力発電所をはじめ、真っ先に大陸からのミサイルが標的にするのはどこか、冷静に考えてみなければならないでしょう。また、沖縄を含む南西諸島に、五〇〇〇km の射程を持つ超高速ミサイルが米軍の促しによって配備されるとき、これが中国ウイグル地区にある五〇〇基の大陸間核弾道弾基地に向けられないという保証はどこにあるのでしょうか。自ら危機と壊滅の道に赴こうとするこの状況を、沖縄・南西諸島の人々といっしょに国民一人一人がしっかり考えなければならないと思います。

写真提供／小西誠　奥間政則
沖縄写真連盟会長 大城信吉
南西諸島各地で基地反対の最前線に立つ皆様より

引用・参考文献
小西誠氏他共著『虚構の新冷戦日米軍事一体化と敵基地攻撃論』（芙蓉書房出版）